太宰府人物志

資料室だより⑫

大宰帥石上麻呂

一般に大宰府の組織や役割は、大宝2年（702）に完成した大宝律令によって確立したと考えられています。したがって『続日本紀』大宝2年（702）8月16日条に「正三位石上朝臣麻呂を以て大宰帥と為す」とあるのは、初代の令制大宰府長官（大宰帥）の任命記事ということになります。ところがこれ以前、令制大宰府の前身に関連すると推定される「筑紫総領」「筑紫大宰」がしばしばみえます。これらの関係についてはいくつかの説があります。初代長官石上麻呂は、文武天皇4年（700）10月15日に筑紫総領に任命されますが、それと同時に小野毛野が大弐（次官）に任じられています（『続日本紀』）。つまり麻呂は筑紫総領からそのまま初代大宰帥に移ったと考えられるのです。このことから筑紫大宰（府）は官司名であり、その長官が筑紫総領という説が提唱されました。筑紫大宰（府）が令制大宰府へと移行し、それにしたがって麻呂も筑紫総領から大宰帥となったというのです。

一方で、筑紫大宰と筑紫総領は全く別物であったとする考え方もあります。この両者は、筑紫総領が筑紫大宰に吸収・統合される形で令制大宰府へと移行していくというのです。この説では文武天皇4年の長官が筑紫総領、次官が大弐という体制は、まさに令制大宰府成立前夜の過渡的なものとなります。この時期の大宰府に関する史料は決して多いとはいえませんから、このようにさまざまな解釈が可能ですが、どれがもっとも蓋然性が高いかを検証することが今後の課題でしょう。

ちなみに石上麻呂は、持統天皇3年（689）9月、新たに制定された位記を伝えるために石川蟲名とともに筑紫に派遣された折、あわせて「新城」を監しています。この新城が大宰府政庁を指すものとすれば、麻呂は令制大宰府の成立に浅からぬ関係をもっていたことになります。その意味で麻呂が初代大宰府長官に任命されたのも、決して理由のないことではないのです。麻呂は養老元年（717）に没しますが、時の元正天皇は廃朝し、従一位を追贈、百姓も追慕して痛惜しないものはなかったと、『続日本紀』は伝えています。

市史資料室　重松　敏彦